

国鉄時代の父と私

写真は『AERA』4月10日号から。「国鉄を始め、昭和の鉄道マンを題材にした『カレンチ』（講談社）などの漫画を手掛ける池田邦彦さんのイラスト。「昭和の時代」をテーマに本誌に描き下ろしてもらった。列車を見送る白手袋の助役、ホーム上に置かれたチッキ（小荷物）。改札から響く鉄（はさみ）の音、貨物上屋の前にはポツンと黒い貨車一。失われた国鉄時代の原風景が描かれている。」



このイラストを見たとき、なんだか懐かしさを感じるとともに、父を思い出した。私の父は、戦前から国鉄（日本国有鉄道）職員として定年退職まで働いた。名古屋機関区や高山客貨車区、そして越美南線の深戸、高山線の下油井・飛騨一宮、中央線の勝川の駅などに勤めた。「鉄道マン」として、生涯を終えたような父だった。そんな父の影響を受け、国鉄に一時はあこがれたことも。生まれてから高校時代まで、「鉄道官舎」住まい。まじかに国鉄、「国鉄マン」とその家族に接してきた。

なんと言っても、父の働く姿で心に残っているのが、深戸駅長の頃だ。深戸駅は当時、郡上郡美並村にあり、美濃太田から郡上八幡の二つ手前、駅員4、5人ほどの小さな駅。駅のすぐ横に官舎が。私は高山の斐太高校1年だったが、父の転勤に伴い郡上高校2年に編入した。当時、高校の編入制度はなく、いろいろ苦勞もあった。郡上高校への編入は、今から考えると、その後の人生を方向づけたように思う。斐太高校では「どんじり」の方だったが、郡上高校ではなんとか成績も上向いてきた。国公立しか行かせてもらえなかったが、なんとか信州大学に滑り込んだ。

話がそれだが、駅長としての親父は、もちろん高倉健さんの「鉄道員」には到底及ばないが、なんだか格好よかった。なにせ赤字ローカル線。数時間に一本のディーゼル車。きちんと背筋を伸ばして、列車を送る姿がいまでも忘れられない。郡上高校には、確か朝2本目の列車を乗り過ごすと、昼まで列車が来ない。駅横の官舎から飛び出し、駅長を勤める親父に「待ってくれー」と。あとから親父に叱られたものだ。

『アエラ』掲載イラストは、「国鉄の解体はリストラの原点」という見出し—国鉄という組織ほど、政治に翻弄された公営企業はなかった。戦前は鉄道省に属し、終戦直前には新設の運輸省鉄道総局に移管された国鉄。1949年6月に公共企業体としてスタートし、高度経済成長で輸送力を飛躍的に伸ばした。だが、自動車と航空機の時代の到来で、64年には赤字に転落。借金漬けの構造から抜け出せぬまま、問題を先送りするだけの再建計画が繰り返し作られた。組織内の危機感は薄かった。

親父は高山時代から「現場管理職」になったと思う。親父に国鉄の解体に至る、国労などの労働組合への対応、リストラの実態なども聞きたかった。

(2017年4月15日)